

ささえあい

No.1 創刊号

発行／前橋在宅ケアネットワークの会

TEL・FAX 027-251-8539

多くの会員に支えられ、待望の会報「ささえあい」が創刊されました。私たち数名の医師が、福祉・教育そ



会長 齊藤 浩

実践報告を！

創刊にあたり

してボランティアの有志の方々によりかけ、本会が発足してから早くも二年半が経過しました。

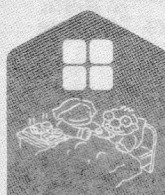
この間をふりかえりますと、私事ですが感動の連続でした。数々の未知の職種の方々を知り合い、それぞれの方の努力と本会への期待の声を聞くとき、やはり、この会を発足させてよかったと集まりのたびに思いました。

現在わが国は、医療福祉ばかりでなく教育界も産業界も大きな転換期にあります。一四回の例会を通じて感じたことは、誰もが危機感を抱いていること、善意の力を信じていること、そし

“助け合い”の気持ちで
お年寄り2「安心」を届けてみませんか？

ささえあいは
市民みんなの
手で

前橋在宅ケアネットワークの会
MAEBASHI ZAI-TAKU CARE NETWORK NO KAI



前橋在宅ケアネットワークの会
には、たくさんの医師、看護婦、保健婦、
ホームヘルパー、市民ボランティアがいて
高齢者を在宅で介護する援助をします。高
齢者をかかえて困ったことがあれば
何でも相談してください。

高齢者の生活しやすい前橋を市民みんなで作らしましょう!!

前橋在宅ケアネットワークの会事務局
前橋市石倉町二丁目7-4 ☎ 027-251-8539

総会のお知らせ

日時
6月21日 13:30～

場所
前橋市職員研修会館3F

記念講演
富岡恵美子弁護士

ぜひご参加ください。

創刊された会報「ささえあい」にはどんなに小さなことでも、文章がますぐとも結構ですので会員一人ひとりの『小さな実践』ができるだけ豊富に登場することが期待されます。皆さん、どうぞよろしくお願い致します。

て職種は違って抱える問題は本質的に共通なのではないかということ。九四年暮、本会の発足を呼びかけた四人の医師が、最初に集った晩の話合いを記録したノートに、『競争と効率優先の社会に対する新たな概念として「高齢者が安心して生活できるまちづくりの実践」を提起したい。』という文章があります。私たち前橋・在宅ケアネットワークの会の活動は地域での実践が生命です。

市内十八地区の責任者、コーディネーター(連絡員)さん決まるノ

昨年暮に開かれた第十三回例会で市内を網羅する連絡網(ネットワーク)を左の図のように決めました。

責任者はすべて開業医です。コーディネーター(連絡員)は各地区でボラ

ンティア活動に取組んでいる方々です。今後各地区の公民館などに集まり、高齢者問題についての学習、援助活動に取組んでゆきます。各地区で、す

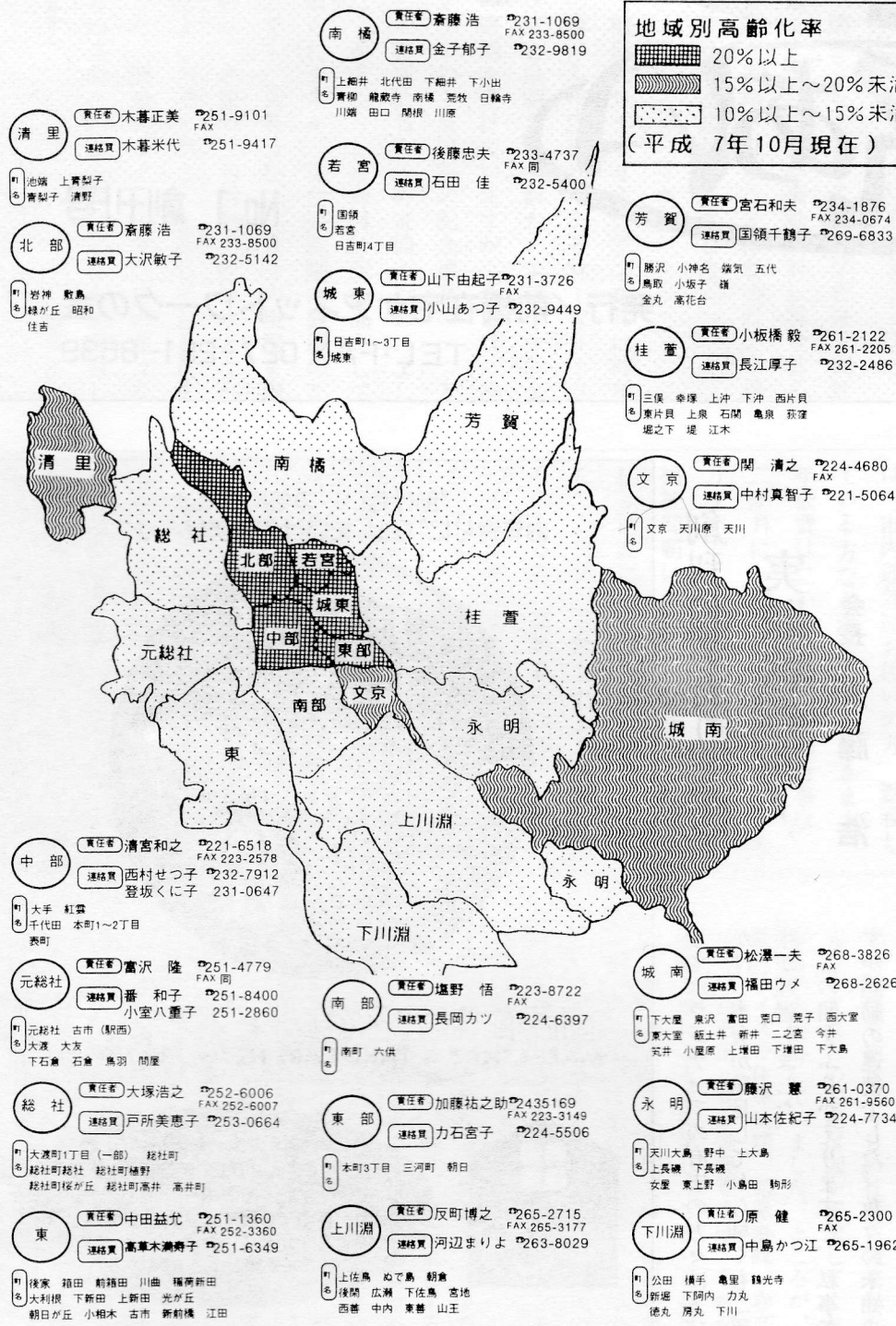
で

にこうした活動を取組まれている団体や個人の方も大勢おいですが、ご指導ご協力をよろしくお願い致します。

*

左の図は十八地区の責任者、コーディネーター(連絡員)さんの氏名、連絡先です。会についてのご意見、ご質問、または高齢者の医療、福祉につ

地域別高齢化率
 20%以上
 15%以上～20%未満
 10%以上～15%未満
 (平成7年10月現在)



前列左から 金子さん(木曜)、石澤事務局長、小池さん(火曜) 後列左から 高草木さん(臨時)、森田さん(水曜) 荒木さん(月曜)、狩野さん(金曜)、鳥居さん(金曜)

○事務局を支える皆さんを ご紹介します

本会の事務局は写真の皆さんによって月曜～金曜の午前中(9時半～12時)開設されています。事務局に詰めて下さる皆さんは全員がボランティアで、曜日により交替で電話を受け付けます。高齢者の介護問題でお困りのこと、あるいは嬉しいことがあればお気軽に電話でご相談下さい。

ての相談があればお気軽にお問い合わせ下さい。
 なお地図は市内の地域別高齢化率を示すものです。ご参考にして下さい。
 (会報担当)



事例紹介

前橋・在宅ケアネットワークの会には『相談カード』が用意されています。『相談カード』は病気や障害で援助を必要とする高齢者と介護者のことを会に知らせる用紙です。この用紙で必要な援助の内容を事務局が把握し、会員の医師やボランティアと連絡をとり、できるかぎりの支援サービスを行います。このページでは、会に寄せられた相談カードからいくつかの事例を紹介します。

事例 I



患者さんは87歳の糖尿病を主病とする姑である。糖尿病性網膜症で眼科医院に行き、帰りに転んで大腿骨頸部骨折を起こし入院した。入院中は回りに嫁いでいる娘たちが毎日看病に行っていたが、退院時にはお嫁さんが自分の自動車で連れ帰ったという。退院してから娘たちは実家へ見舞いに来ないとのこと。入院するまでに毎月私院に来ていた方なので、私は退院後しばらくして往診してみた。立派な母屋に寝ていて1月下旬というのにストーブ一つ無い。お風呂に1回入ったきりだと言う。入浴サービスの あること、スマイル手帳を貰うとデイサービスも受けられること、お嫁さんには「あなたが近所の婦人たちと慰安旅行に出かける時にはショートステイも受けられる」と等話をした。

病人はポータブルトイレも持っていない。トイレに行きながらおしっこを漏らすのをお嫁さんがくどいた。お金が無い家でもないので一緒に行った看護婦に尿が漏れない工夫を研究して貰った。その後パンツ式のおむつを買って、毎日具合が良いとのこと。私はこのおばあさんの状態を何とか改善してやりたいと思い、その後月1回往診している。おばあさんは若い時はなかなかかしっかりとしていてお嫁さんは大変だったと近所のおばあさんが私医院に通院しており、二人の嫁と姑の関係を説明してくれた。2回目の往診の時、おばあさんに聞く。「お風呂に入ったかい？」と。「まだ寒いから」と答える。お嫁さんに入浴サービスの方はお願いましたかと聞くと、おばあさんがまだ寒いからというのでそのままだという。私にはどちらが悪いからと分らないが、折角スマイル手帳があっても入浴サービスの制度があっても利用させてあげられないケースである。それでも3回目の往診の時には口調が

大分柔らかくなり、市の福祉制度を利用したい方向に傾いてきた。

現在、この患者さんは申請によりパキンソン病の特定疾患医療給付により医療費は全額公費負担、月3回の入浴サービス、水木の午前中訪問看護、月水金の午後1時からホームヘルプサービス等々の保健福祉サービスを受けています。それでもまだ老齢のお嫁さんには介護は辛く、火木土の午後ボランティアも募集しております。どなたか手伝って頂ける方がありましたらよろしく願います。

(T医師)

事例 II



患者さんは約11年前から受診している逆流性食道炎・高血圧症・頸肩腰膝など全身の間接や筋肉を痛がる肥満型の77歳の姑である。受診のたびごとに訴えが長く、主に家庭内のいざこざを口説かれるので、アリギリスの会の会長である番さんに家庭訪問をお願いした。

番さんが訪問してくださった結果を総合すると、一軒の実をお嫁さんと子供たちそれにこの患者さんとで共有して暮らしていて、最初はお嫁さんは一

生懸命姑に尽くしてきたが、お食事を出してもご飯がおいしくないと、ことごとくに文句を言われて、段々とひとつ家にながら別居するような形になってきた。今ではお勝手は共有しているが、患者さんの話によるとお嫁さんが使ってから姑さんがお勝手を使う、お風呂も先に入らせてもらったが汚れたというので全部流されてしまって、結局後で入るようになったというようにこじれてきて、今はお嫁さんからお勝手とトイレは姑さんが作って下さいと言われているとのこと。

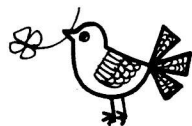
患者さんはヘルパーを希望しているが、お嫁さんが反対しているので説得して欲しいとか、息子さんに年金を全額渡すから面倒をみてくれるかと頼んだという訴えを聞くと、保健、医療、福祉の制度が、いかに充実しても、このような場面では無力だと感じました。今後、事例検討会等とおして、解決の道をさぐってもらいたいと思います。

(T医師)



ボランティア活動紹介

アリギリスの会

高齢化社会を
明るく生きる
アリギリスの会

高齢化社会の仲間づくり

今や人生八十年時代の長寿社会となり、そのこと事態は喜ばしいことであるが、高齢化のスピードがあまりに速いため、本人自身の心構えは勿論、行政の対応の立ち遅れも否めない。こうした現状を考えると、住みなれた地域で人生を全うするためにはどうしたらよいか、深刻な問題に突き当たらざるをえない。



『アリギリスの会』はこのような問

題を考え、地域で共に助け合い、明るい共生の社会を作りたいとの願いから生まれた相互扶助の会である。当初、地区民生委員と母子保健推進委員が核となり、有志十名ほどが一年間、月平均二回の勉強会の末、自治会の理解を得て趣旨を町内に回覧し、三十名ばかりの賛同者と平成二年七月に創立総会を開くことができた。イソップ物語のアリとキリギリスの寓話からヒントを得て、困ったときはアリのように汗して力を合せ、またあるときは、キリギリスのように楽しくスマートな会にしたいとの願いから「アリギリスの会」と命名した。

基本的な考え方としては、必ずやってくる高齢化社会に向って、お互いに助け合いながら豊かな人間関係をつくることを目的に、何をなすべきか、何ができるかを考え、自分達の手で自分の為に、明るく住みよい地域社会を作っていくという事になった。即ち、豊かな人間関係づくりと、困ったときの助け合いを二本の柱とした。

顔の見える助け合い

現在、四十代から八十代までと平均年齢は六十才を超えたが、会員数百三名のうち男性十九名、女性八十四名、夫婦会員十三組と六年間で約三倍の数となり、それなりに地域においては評

価されてきたものと思っている。そして、百三名の会員を小地区ごとに十班に分け、各班二名の幹事をおき、班ごとに連絡網をつくり、「担い手登録台帳」を幹事が保管し、助けが必要なきはすぐに対応できる態勢となっている。毎月第一土曜日の午後は定例役員会を開き、情報交換や会の企画運営も行っている。そしてこれをもとに、会員を対象として月一回家庭介助や救急介護法、福祉施設の見学等相互扶助のための知識も学んでいる。

なんとしても、顔の見える助け合いが第一なので、食事会や旅行、趣味の会など気楽に参加できて楽しめ、お互いの気心を知るための行事を心がけている。中でも日帰りの小さな旅は人気でこの毎月の集いが楽しそうなので入会した会員もいると聞くが、それはそれなりに、連帯感を生むうえで重要なことと考えている。

毎年二月の不用品のリサイクルを目的にした「のみの市」や町内の夏祭りに出店する「アリギリスの店」は年会費千円と共に重要な会の運営資金となっている。こうして五年を経過し、「助け合いの要領」や「助け合い手帳」もでき、一時間二人組で五百円の有償サービスで動き出した。

実際には依頼者はまだ少く、通院の

介助、病人家庭の洗濯等の家事サービス、不祝儀の手伝い、留守番や留守宅の庭木の水やり、老人の句集刊行の手低いなど、徐々に活動の幅も広がってきた。また、平成八年九月には男性会員の「男子厨房に入ろう会」が発足し男性の自立はまず食事からと、区民会館の恵まれない施設の中で楽しい会を發展させている。今年二月の「のみの市」には実習したカレー弁当を作り、当日当番会員の昼食のほか一部売り出し、会の活動資金は勿論、女性会員からも感謝されていた。

今後の課題

会のアンケート調査によると「困ったときは家族に期待」という回答が七八%もあった。会員の中にも「助けられるほうが難しい」という意見が出た。日本人の国民性というか閉鎖的な面がみられ、助け合いがいま一步スムーズにいかない点は否めない。また、国のゴールドプランのアンケートによれば市町村長の五四・七%がプランの具体化は財源難により達成困難と考えていることがわかった。更に介護保険の導入は、自治体の行政力により格差を生じ様々な問題を取り残すと考えられる。こうした中で、当会としては担われ手の要求にどこまで応えられるか、会の活性化の為に若年層の掘り起こしを

どう進めるか、楽しく魅力的な会にするにはどうしたらよいか、男性会員の積極的な活動をどう促すか等々、会員の多様化の中で様々な問題に遭遇している。

会としては、今後が真価を問われる大事なときではあるが、平素の付き合いを通じ気負わずに、息の長い活動を続けたいと思っている。幸い土壌に恵まれているので、地元の支援や会員の協力を得ながら、十年、二十年先にアグリリスの会があつてよかったと、お互に思えるような会になればよいがと願っている。

(代表・番 和子)

ゆうらいふ会

ハンディキャブ号 紹介



私たちは、重度障害者三名と私共夫婦の五名で『ゆうらいふ会』という障害者や高齢者を対象とした相談所を平成八年一月開設しました。

当初は、在宅での自立支援を目的に福祉機器のリサイクルを始めたのです

が、行政の支援体制も整い、また利用者側の要望もあつて、販売やレンタルも始めました。

福祉機器の支給を受ける場合には、障害の程度の認定が必要で、そのために認定機関へ出向き判定を受けなければなりません。ところが、重度の障害者や寝たきりの高齢者には、判定を受けるために出掛ける主段や方法がない場合が多く、これがハンディキャブ運行のきっかけとなりました。

その後、利用者から通院など個人的に使いたいという相談があり、貸出を行うようになり、週二回程度の運行ですが、ボランティアの方の都合がつけば運転者付で運行しています。当面は私たちの居住地（前橋市堀之下町）を起点として、五〜六km以内に範囲を限定させてもらっていますが、事情に合わせて拡大も考えています。

ハンディキャブの運行は、幼い時から比較的自由な時間のあつた父が、近所の人に頼まれると病院や駅・葬儀など、時間の許す限り応じていたという姿を見ていましたので、特にボランティアという意識をもつこともなく始めることができました。

そんな父が、数年前に脳疾患で半身不随の身体になり、半年間の入院生活後は社会からの断絶を宣言したかのよ

うに、家に閉じこもってしまったのです。家族は困り果ててしまいました。ハンディキャブを持つ身になると、必然的に行動範囲は限定され、社会参加の扉も狭められてしまいます。と同時に自身の心も閉じてしまう傾向があるようです。父を見てみるとそう感じました。



家の中で、家族との関係だけでは生きていくことが辛くなります。ハンディを持ってても社会との接点をどれだけ維持することができるか。「外出」の重要性を認めざるを得ません。ハンディキャブの運行の役割はその辺にあると考えています。

最近の事例を紹介します

A子さん（八十六才）は、一年前に骨折し入院。退院時には痴呆がすすみ寝たきりの生活になる。時間の観念もなくなり、夜の独言で介護者（嫁六十才）は混乱してしまい、睡眠不足に

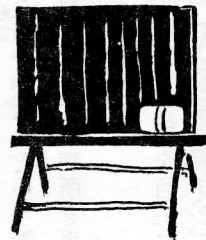
悩む日々が続いていたという。介護支援センターからの要請で検査通院に同行することになる。

午前十時にお宅へうかがい、ベッドから車椅子に移そうとするが、関節は拘縮しており、動かそうとするものすごい声で騒ぐので、バスタオルとシートを使い介護者の協力を得てやっと車椅子へ。ところが、タンス等の家具がじゃまをして、部屋から廊下へ出ることができない。家具を移動させ廊下へ出るが、今度は狭くて車椅子が曲れない。さらに玄関にも四〇センチメートル位の段差がある。

多くの家が、車椅子を利用することを想定した家作りは行われておらず、高齢者が障害をもつようになると、家に閉じこめられてしまうという現状を痛感する。十時三十分、Aさんと介護者を乗せて応院へ。帰路、「街を見たい」というAさんの希望に沿って繁華街を運行。自宅近くのホームドクターへ立ち寄る。何十年来の付き合いが、痴呆症のAさんの表情も病院とは違うことに気づく。一時三十分、家へ着く。来月の約束をして帰る。ハンディキャブの運行を通して、さまざまな人たちとふれあい、学ぶことの多さに改めて驚く毎日です。

(代表・郷 幸男)

掲示板



○前橋北ロータリークラブより

五十万円のご寄附を

いただきました。

前橋北ロータリークラブ会長・荻野信一氏より当会の活動に対し現金五十万円が寄贈されることになったと三月二四日、連絡がありました。

*

前橋北ロータリークラブからは昨年の春にも市内に六つあるロータリークラブと協調して十数台のエアーマットの寄贈を受けていますが、今回は、同クラブの十五周年の記念事業の一つとして特別に当会への寄贈が行われました。通常こうした寄付は記念品として贈られますが、現金の寄贈は異例のことです。荻野会長は「貴会の現況を理解し、今後の援助活動の呼び水となればよいのですが」と話しておられました。前橋北ロータリークラブの並々ならぬ当会へのご支援に心から感謝致します。

(斉藤浩)

○募金額九〇万円集まる。

ポスター・募金箱の制作のために、医師の会員にあてて要請した募金は九〇万円となりました。有難うございました。

ご入会のお勧め

前橋・在宅ケアネットワークの会は、市内近郊にお住いの方、勤務している方なら誰でも入会できます。年会費は二千円です。会の行事は、二か月に一度会員が集まる例会があります。ここではお年寄りの医療・福祉問題についての勉強や、地域の福祉活動について関係の各分野の人たちと交流、懇談が行われます。関心のある方、高齢者の住みよいまちづくりに興味ある方はぜひご入会下さい。

97年度

会費納入のお願い

本会の財政は主に会費で賄なわれています。4月から翌年3月末までの年会費は二千円です。会費は主に通信費となります。

今回郵便振替用紙を同封しました。最寄りの郵便局でお早めの納入を期待します。

(財政担当)

編集後記

巷には『最新』と称されるさまざまな情報が飛びかい、それが瞬時に『陳腐化』し、昨日まで『価値のあるもの』と思われていたものが、翌日には全く『価値を失う』というめまぐるしい社会の中で、私たちは『確かなもの』の存在を見失い、みえない不安を感じながら暮らしています。

政治、経済、教育とあらゆる分野に多くの問題を抱えた今日の社会。従来私たちは、これらの問題は国が解決してくれるものと安心していました。ところが、薬害エイズや住専処理、原発事故、彩グループの不正、ゴミ処理等々は、それが機能しないことを露呈してしまいました。とくに、薬害エイズ問題では、国民の健康を守る立場のはずの厚生省が、一部の企業の利益を優先させるために、国民の生命を犠牲にしようという現実をみせつけられました。

私たちは、これから高齢社会を生きなければなりません。制度だけに依存するのではなく、生きることの最終極面にある『老い』や『死』を、高齢者介護という社会問題として捉えるのではなく、自らの最も身近な問題という視点で考え、行動してみようという試みが、在宅ケアネットワークの会の基にあります。

老い、その先にある死。ここが生きていることの原点です。ここが軽んじられてしまう社会は、どんなに物に恵まれ、どんなに日々が楽しくても『真に豊かな社会』だと言えますか。

(編集担当 清水)



○主なプログラム○疾風!馬群曲芸ジグト
・犬のサーカス・アラブ・空中ブランコ
・空中アクロバット・スーパージャグラー
・棒上アクロバット・他

S席・A席に
余裕が
あります。

群馬テレビ開局記念チャリティー特別公演

97国立ポリョイサーカス

5月3日(祝) 4日(日) 5日(祝) 会場 群馬県総合スポーツセンター ぐんまアリーナ

■入場料金(消費税込)(3才以上同一料金)
SS席(指定席) ¥5,000 S席(指定席) ¥4,000
A席(指定席) ¥4,000

群馬テレビ

前橋市上小出町3-38-2
☎027(232)1181